悪役上等！　武装戦闘国家ゼクトール

アズマダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪役上等！　武装戦闘国家ゼクトール

【Ｎコード】
Ｎ０７５３Ｚ

【作者名】
アズマダ

【あらすじ】
もしも、高校生が絶対君主制国家の国王になったとしたら？
そして、国民における女の子率が、異様に高かったとしたら？
さらに、国民の生与奪権が国王にあったとしたら？
そのうえ、主人公を補佐するのが幼なじみの少女で、その子が暗躍しまくったとしたら？
あまつさえ、その国が滅亡の危機に瀕していたとしたら？
その危機を救えるのは？
よーし、まじめにいってみよう！

1．ニホン

序．

白い指だ。
細くてしなやかな少女の手が、白い砂に埋もれかけた写真を拾い上げた。
端が焼けこげた大判の写真。
細くて華奢な少女の手が、白い埃を丁寧に払いのける。
どこかぎこちない笑顔で収まる、十一人の集合写真。
中央に映っているのは、夏の制服を着た少年と少女だった。

1．ニホン

「ちょっと桃矢（とうや）！」
怒りにまかせた幼馴染みの声と共に、Ａ４サイズの雑誌を入れた紙袋が、桃矢の後頭部に直撃した。
芦原桃矢（あしはらとうや）は、言い返したい言葉を飲み込んで、頭を抱えうずくまる。おさまりの悪い毛が一本、指の間から飛び出して左右に揺れていた。
「デートしてた女の子に対して、何も言わずに先に帰るってどうよ？　それでも健全な高校生？　十七歳男子？」
雑誌を拾い上げ、砂埃を丁寧に払い落とした後、騎旗桃果（きはたももか）は不平を口にした。

「デートって、……桃果ちゃん。学校の帰りに寄った本屋でフランカーの特集号を食い入るように立ち読みしてたのは誰ですか？　ロシア製新鋭戦闘機を穴が空くくらい眺めてるだけのデートなんて初めて聞いたよ」

アドレナリンが誘発した汗が、桃矢の額を濡らす。汗を拭う手が、意図的に長く伸ばした前髪をかき分ける。髪の隙間から大きなホクロが顔を出す。綺麗な五角を持つ星形の珍しいホクロだ。

ホクロが空気に触れたことを察知した桃矢は、慌てて前髪を下ろす。

「お！　桃矢の恥部を見るの久しぶりね！」

桃矢は、嫌そうな眼で桃果を見上げる。

夕方とはいえ、まだまだ力を保ったままの太陽。その陽光を背にした桃果は、光の中にいた。

夏の制服がよく似合う桃果。スカートのプリーツを透かして、形よい足が見える。

桃果は無邪気に笑っていた。

何物にも代えがたい輝きの笑み。このかわいい笑顔を見たいが為に、同年代の男共は身の程を超えた努力にいそしむのだ。

生まれたときからの付き合いを誇る桃矢でも、時々だまされたくなる太陽のような笑顔。

道行く十人が十人とも振り返るほど可愛いんだけど……中身を知ってる桃矢は素直な反応をよこさなかった。

「戦闘機の写真集だから痛かった？」

背中まで伸ばしたサラサラの黒髪を指ですくい上げる桃果。

いまだ痛みの引かない頭頂部を片手で押さえている桃矢。
「写真は鉄の塊のを撮ったんだろうけど、媒体は紙だからね」
「じゃ、痛くないわね。さ、帰ろ帰ろ！」
話は済んだとばかりに、ズカズカと歩を進める桃果。

桃矢には、そのいい加減さに思い当たる節があった。
「桃果ちゃん。ご両親さぁ……」
「言わないで！」
先程までのおどけた空気がない。桃果は、ぴしゃりと桃矢の言葉を封じた。
桃矢は肩をすくめてから歩き出す。桃果も、無かったことにして先を歩いている。

毎日の毎回の繰り返し。いつの間にか、いつもの終わりが始まっている。
角を曲がれば桃矢の家。向かいは桃果の家。
角を曲がれば……。

「あれ？」
「なによ？」

曲がったとたん、桃矢が立ち止まる。芦原家の前に止まった、黒塗りの大型車が一台。
車の周りには、ガッチリした体格かつ黒服の男達――ならぬ、グレーの制服が三人。
「軍服……のコスプレ？　」
桃矢の頭の中をいろんなアニメ雑誌記事が、回り灯籠のようにゆっくり回転している。が、見覚えのないデザインだ。

灰色の男達の背後から、四つめの影が現れた。同じデザインの軍服を着ているが……。
線が細い。
桃矢と同い年であろうと思われる、背筋を伸ばした美少女が、七分の構えで立つ。
後ろになでつけた短い金髪は絹のように細く、アイスブルーの目が底抜けに冷たい。
どのような混血の結果か？　きめの細かい浅黒い肌が、彼女の人種を複雑にしていた。

「トーヤ・アシハラ様……ですね？」
「は、はい」
それを合図に、男の一人が車の後部ドアを開ける。と、同時にエンジンがかかる。

これはまずい。大変まずい展開だ。桃矢の脳裏に「拉致」の一言が浮かぶ。
「初めまして。わたくしミウラ・ヴァイツと申します」
肩パット入りの制服とタイトミニが、凛々しくも美しい。
「事は急ぎます。トーヤ様、我らとご同行願います」
両脇を灰色の男達にガッチリつかまれた。万力で腕をはさまれた感覚。もがいてみるが微動だにしない。

「ちょっと、あなた達誰よ？　ここは法治国家日本よ！　最近この近くで誘拐事件があってね。この辺、警察のパトロールが頻繁なのよ！」
桃矢と車の間に立ちふさがる桃果。こういう時に機転の利く、頭の回転が速い子だ。彼女を頼もしく思う時点で、男失格だなと思う桃矢。

厳つい男が、丸太のように太い腕を伸ばし、桃果をよっこらせと脇へ退かす。
ミウラと名乗る少女は、微笑みもしなかった。
桃矢は、鏡で自分の顔を見たくなった。我ながら情けない顔をしているだろうと思う。
「だめよ！　桃矢はこれからあたしと百里へ、イーグル見に行くのよ！　先約よ！」
「そんな約束してないって！　僕は軍事オタじゃないから」
桃矢とミウラの両方から無視される桃果。だが、負けない。
再び、前に回り込む。
「これを見なさい！　このひもを引き抜くと警報が鳴って警察が大挙して押し寄せてくるわよ！　そうならないうちに桃矢を離しなさい！」
桃果が持っているのは白い携帯と、訳あって表現できないが、世界一有名なビーグル犬のストラップ。引き抜いたところでブザーは鳴らない。お子様携帯であるわけでなし、もとよりそんな機能はついていない。
ミウラはまじまじと桃果を見つめている。
「さあ、どうするの――あ！」
桃果の携帯は、手首のスナップを利かせたミウラの猫パンチではたき落とされた。
「ああっ、ちょっと！」
嫌な音を立てて落下した携帯を拾い上げようと、慌ててしゃがみ込む桃果。
「あああぁ、ちょっと！　ちょっと！」
一方、宙ぶらりんになった桃矢。抵抗虚しく、コンパクトに車の

中の人となる。

と、窓の外に母の姿を見た。
「お母さん！　助けて！」
車の中から大声で叫ぶ桃矢。
偶然か神の思し召しか。うまい具合に母と視線が合った。
「行ってらっしゃい。体に気をつけるのよ！」
笑顔で送り出す母。手を振っている。

店の奥から、父が姿を現した。
「父さーん！　助けてー！」
ウインクしながらサムズアップする父。キラリと光る白い歯がとてもダンディ。

「どういうことーっ？」
桃矢のいつもの日常は、あっけなく幕を閉じたのだった。

有無を言わさず空港へ。国際線の大型ジェットに乗ること十数時間。
さらに、一回り小さいジェット旅客機に乗り換えて数時間。もう一度乗り換えた三十人乗りのプロペラ機が水平飛行に移った時、たまらず桃矢が口を開いた。
「あの！　僕どうなっちゃうんでしょうか？」
対して、大きく目を見開くことで答えるミウラ。

「どうって……トーヤ様、なにがどうなのでしょうか？」
桃矢は理解した。話が噛み合ってないのを。
「何で僕が拉致されなきゃならないんですか？」
ミウラは微かに口を開いて動かなくなった。目の光も鈍くなっている。

桃矢が待つこと十数秒。状況を判断しおえたのか、ミウラの目に再び明かりが灯る。
「ひょっとしてトーヤ様、ご両親からは何も聞いておられないのでしょうか？」

自分のことを「様」付けで呼んでもらっているところを鑑みるに、可及的速やかな危機はなさそうだ。と、なると、桃矢にも、ある種の感情が自然発生する。
ズバリ、その名は怒り。
「だから、何が何だか解らないから聞いてるんですって！」
「アイヤウェイ！」
母国語であろうか？　聞いたことのない単語を口走り、左手を額にあてるミウラ。なにか重大な齟齬をきたしたらしい。

ミウラは居住まいを正した。
「トーヤ様。数々のご無礼お許し下さい。改めて全てをお話しいたします」
一旦言葉を句切り、ミウラは視線を前後左右に素早く走らせる。その仕種につられ、桃矢もキョロキョロとあたりを見渡した。
いつの間にか、灰色の大男がいなくなっている。その代わり、不自然な人が増えていた。
アロハシャツを着た人の良さそうな老人が、紙コップに入ったコ

ーヒーをすすっている。新聞を広げる背の高い婦人。居眠りする老婆。難しい顔をして窓を睨んでいる中年女性。

人種はバラバラだが、ミウラの軍服を気にしている人は一人もいない。

これはっ、全て同じ穴のムジナっ？

「我らが母国の名はゼクトール。ゼクトール王国と申します」

姿勢の良いミウラがさらに姿勢を正す。

桃矢は、初めてミウラを正面から見据えることになる。小さい顔。日本人離れした美しき風貌。……日本人ではないが。

威風堂々としたその態度、とても同年代には見えない。

桃矢はミウラの瞳の色、アイスブルーが、色に等しい温度をもったように感じた。

「トーヤ様はゼクトールの次期国王なのです」

この間、きっちり三秒。

「はい？」

いまいち、よく聞き取れなかった。

「トーヤ様は、ゼクトール民主主義国前国王ゼブダ・バルギトル・ゼクトール様の跡継ぎなのです」

「えーと、……いい病院紹介しましょうか？」

「言い直しましょう。前国王が身罷られた今、トーヤ様が次期国王に決まったのです」

「なんですとぉーっ！」

前の席から身を乗り出して叫んだのは桃果であった。

1．ニホン（後書き）

今回、そんなに深く考えていません（w）
女の子も、百万人は出てきません（笑）
全４０話程度の予定です。

2. ゼクトール

「な、なんで桃果ちゃんが？」
桃矢は自分の身の上話より、桃果が、今ここにいる事に強く疑問を感じている。

「るっさいわね！　そんなことよりあなた、ミウラ！　続きを早く話しなさいよ！」
目を大きく見開いたまま、しばし動揺を隠せないミウラ。その間のミウラは年相応の顔をしていた。ついでに言うと、周囲の一般人らしき人々も中腰になっていた。

ミウラは、桃果の気迫に押されるようにして話を続ける。
「ゼクトールの前国王には、お子様がございませんでした。つまり、息を引き取られた時点で、王家の直系が絶えてしまったのです。傍流のお血筋で、王位継承にもっともふさわしい条件をそろえておいでなのがトーヤ様なのです」
桃矢の感覚は麻痺していた。理不尽な出来事に続いて、極度の緊張を持続させたためか、情報の入り口が狭くなっていたのだ。

桃果の手が伸びたのに気付かない。そっと伸びた桃果の小さい手が桃矢の額をさわる。そして、桃矢の伸びた前髪をかき上げた。
「これね？　この星形のウルトラビームね？」
「いや、あのね桃果ちゃん――」
こういう我に返りかたは嫌いだった。

「それです。ゼクトール王家の血を濃くひく方々に、たまに現れる遺伝上の特徴です。星形のお印を持つ方が、最も初代に近いと言われています」

桃矢のデリカシーなど問題外の事らしい。

「でもさ、僕は日本人顔だよ。両親も日本人だし、両方のお爺さんお婆さんも日本人だよ」

桃果の手を乱暴に払い、前髪を元に戻す桃矢。

「第二次世界大戦末期、我が祖国ゼクトールへ侵攻した日本軍が、両国親善のためと称し、王家の姫君、キリア・ウハウハ・ゼクトーラ様を日本へ連れ去られた。その姫様がトーヤ様の曾お婆さまでございます」

「さすがに三代前は聞いてないな。……つーか、そんな話が本当にあったらマスコミが喜んで大騒ぎしてるよ！」

笑顔を浮かべようとしたが、頬が引きつっただけだった。

「その部隊が目的不明の秘匿部隊であったこと。部隊が撤退中に、連合国軍の攻撃で壊滅的打撃を受けたこと。生き残りが姫様を託した輸送部隊に、トーヤ様の曾お爺さまがおられたこと。そのあと、生き残りの方々が、姫君を落ち延びさせるため特攻攻撃を掛け、全滅したこと。等々、いろんな事が重なり、表に出ない史実として闇に埋もれていたのです」

一般人を装う乗客達は、普通の乗客に戻っていた。ただ皆、一様に沈痛な面持ちであった。その事が、マシーンになりきれない彼らの国民性を物語っているのかもしれない。

「隔世遺伝ってヤツ？」

桃果の問いに、うなずくミウラ。ミウラの瞳は力強い光に満ちていた。しかし、今までとは違った光。強い忠誠心に満ちあふれた従順な家臣のもの。

「ふっ！　仕方ないわね」
まったく、桃果は空気を読まない子だ。桃矢はいらだちを覚える。
恐れ以外の感情が桃矢に現れた。それは周りを見つめる余裕ができた証拠なのだが、彼は気付かない。
「わたしが桃矢王朝の為に一肌脱いでやろうじゃないの。で、どこよ？　ゼクトールとかいう国の場所は？」
腕を組んで鼻から荒い息を吐く桃果。口をあんぐりと開ける桃矢。
桃果はこの状況を受け入れている？　なにゆえ？
「えーと、桃果様でしたわね？」
元の冷たいアイスブルーに戻ったミウラ。警戒心を露わにした言葉は冷気を帯びている。
「桃果様は、早々にお帰り願います。ご近所の幼馴染みというだけでは、おつきあい願えません。第一、ご両親が心配なされているでしょう。お電話でもなさいますか？」
ニコリともしないミウラ。ごつい携帯を桃果に渡す。恐らく軍用と思われる。
「大丈夫！　そんな必要ないわ！」
腕を組み、傲然と笑っている桃果。頭が天井へ付きそうになってるところを見ると、座席の上に立っているのだろう。
「だ、だめです、それでは理由になりません！　ご両親と、よく話し合ってください！」
眉間に皺を寄せ、困った顔をするミウラ。何にこだわっているのか。
「いいのよ、あんな連中！」
「家族は大事にしなければなりません！」

桃果の言葉にミウラが即反応した。反応の早さに桃矢が驚いた。
ミウラの絡みようは、道徳心だけから来るものとは思えない。酷く真剣な眼差しだ。

「あたしに家族はないの！　あたしの両親は離婚したの！」
ミウラの動きが止まった。
新聞を読んでる人も、コーヒーをすすってる人も、動作を止めている。
機内の空気が堅くなった。

「夕べ離婚届に判子を押したわ。あたしが立会人よ！」
「やっぱりだめだったの？」
家は隣同士、高校は一緒。桃矢は、ある程度の成り行きを知っている。お人好しの桃矢は、自分の身に降りかかる不幸を脇に置き、桃果の今後を心配している。

「お父さんもお母さんも、家や家族を守るつもりなんて、最初からこれっぽちも無かったって事よね。やっと家族が終わったって。そんなこと言ってた」
いつものような、明るい笑顔を見せている桃果。
桃矢の目には無理をしている様に映る。こんな場合、どう声をかけてやればいいのか？

「親御さんは子供のことを、あなたを必ず愛しているはずです！だから、諦めずにもう一度お話しすべきです！」
言葉を紡いだのはミウラだった。
クールビューティは眉を寄せていた。なにゆえか、ミウラは桃果の家庭を心配していた。

「親を好きにさせてやるのも子供の愛情よ！」

指を一本立て、チチチと左右に振る桃果。

「しかし――」

家族にこだわるミウラを桃果が遮る。

「あたしは、絶対に家族を守りきる大人になるわ！　死ぬまで家族を終わりにしない！」

太平洋高気圧のような凄みのある笑み。桃矢の目には、それが痛々しく映った。

「ところでミウラさん？」

桃果は座席から、いきおいよく飛び降りた。

「あたしは騎旗桃果。彼は芦原桃矢。二人とも名前に桃が付いている。なぜだかわかる？」

桃果は話の方向を意図的に反らしている。ミウラのアイスブルーに興味の色が浮かんだ。

なぜだか？　と言われても説明に困る。大それた理由などないからだ。じつは、先に生まれた桃果の「桃」の字を気に入った桃矢の母が、こじつけで付けた名前だったのだ。

「我が騎旗家は明治の御維新からこっち、ずっと芦原家嫡男の護衛を務める家柄なの！」

いや、いやいやいや。芦原家が先祖伝来住まいしていた土地に二十年前、騎旗家が越してきたのだし、次男の桃矢は嫡男じゃない。兄が一人いるし。

そんな関係は成立しない。

「十七年前に星形のホクロを額にもって生まれた男の子。偶然同い年に生まれたあたしと桃矢は等しく育ち、等しく教育を受けてきた。それはね、桃矢の考え方を理解し、力添えをする為よ。いわば、あ

なた達とあたしは同志なのよ！」

二人は同い年だし、同じ高校に通って同じ教科書を持っている。桃果の言葉に嘘はない。嘘は言ってないけど、本当のことも言ってないパターン。

さすがに桃果を見てられなくなった桃矢。ミウラの顔色をうかがった。

彼女は目を見開き聞き入っていた。意外と素直な少女である。

いやいやいや、腐っても軍人……腐るほども年取ってなさそうだが……、そんなフェイク、ミウラが信じるわけないだろう？

「どうかご協力お願いします」

頭を下げるミウラ。白く固まる桃矢。

「任せなさい！」

ますます鼻息が荒くなる桃果。そこそこに豊かな胸を反らしているのだった。

2．ゼクトール（後書き）

さてさて、話が走り出しました。

ついでにポチッと評価ボタンを押してください。

3．コバルトの海

「ところで、ゼクトールって王制を敷いているところから見て絶対君主主義国家？　ねえ、軍事国家でしょ？　戦闘機は何を採用してるの？　ミラージュ？　それともF？」
たたみ掛ける桃果に押され気味のミウラ。

「えーと、ミグ――」
「あーそっち系ね、はいはい！　小さい国特有ね。いいわよいいわよ、あたし向きよ！」

桃矢は、あきらめ顔で飛行機の天井を見上げた。
やれやれ、どこでも桃果ちゃんは桃果ちゃんなわけで……、でも桃果ちゃんのおかげで気持ちが軽くなった。
冷静に考えると桃矢の立場は低くない。余裕じゃん！
そこまで考えが及ぶと、俄然、桃矢の中に怒りが込み上げてきた。

「僕は国王を引き受けるなんて言ってないよ！　第一、僕の親が黙ってない！　今頃警察沙汰になってるよ。へたすりゃ国際問題だ！」
大声を出す桃矢。対して、らしくない顔をするミウラ。彼女に対するスマートなイメージがどんどん崩れていく。……これ見よがしな桃果の舌打ちは、聞かないフリをする。

「ご両親からは許可をいただいてますが？　当然、理由はご存じでしたし」
「あれ？」
ちょっと、……こう……期待していた答えと違う。

「僕に電話貸して！」

母から帰ってきた答えはこうだ。
『あれ、言ってなかったっけ？　でも、ミウラさんっていい人でしょ？　かわいいし』
「父さんに代わって！」
『父さんだ。思ったより早かったけど、まあいい。男はいつか旅立つものと相場は決まっている。盆と正月には帰ってこいよ』
桃矢は電話を静かに置いた。世にも情けない顔をして振り返る。
「もちろん日本政府にも、外交的に話がついています」
ミウラがとどめを刺した。
もうだめだ！　膝を抱えて、床にうずくまる桃矢。
「可哀想に」
優しく桃矢の頭を撫でる桃果。目にいっぱいの涙を浮かべて桃果を見上げる桃矢。
……桃果は嬉しそうに笑っていた。
「トーヤ様、どうかご安心を。トーヤ様が思っておられるような責務を我らは求めておりません」
初めて柔らかい笑みを浮かべるミウラ。
「は？　はぁ？」
「えぇーっ！」
腑抜けた声を出す桃矢と、あからさまに残念そうな声を上げる桃果。
「いわば素人のトーヤ様に、今までの生活を捨てて王になれと申し上げるのも、それは無理な話。我らとて重々承知しております。これはあくまで形式的なものです」

まずは桃矢を安心させるため、結果を先に言うミウラ。

「ゼクトールは今、問題を抱え込んでおります。といっても、トーヤ様がお気にかけられる類の問題ではありません。政治形態に王制を採るゼクトールといたしましては、政府首脳部が案件を解決するにあたり、仮初めとはいえ国王が必要なのです」

ミウラは、一息ついて桃矢達の様子を見た。ツバメの雛のように口を開けている桃矢と桃果。上々な結果である。

「トーヤ様におかれましては、ゼクトール政府の機能回復のため、いくつかの案件の承認と権限委譲に同意していただくだけで結構です。それもたった二日間。ご迷惑はおかけいたしません。合間に、郷土料理や名所観光などでお楽しみいただければよろしいかと」

固い笑みをぎこちなく浮かべるミウラ。

「いわば、機内移動時間無視のゼクトール国王体験一泊二日の旅をご満喫！　って解釈で良いのかしら？」

ミウラの説明に納得いったのか、桃果が合いの手を入れる。

「はい、正にその通りでございます！」

今度こそ、心底にっこりと微笑むミウラ。年相応の笑顔。とても可愛かった。

しかし――。

「冗談じゃない！　そんな一方的で理不尽なナニに付き合うほど僕は暇じゃなキュ！」

「キュ？」

細い眉を寄せるミウラ。

そこには、後ろから桃矢の首に腕を絡ませた桃果がいた。

立ったままのネックブリーカー。容赦ない事で有名な技だ。

「で、ゼクトールって何処にあるの？　教えてちょうだい」
桃矢のことはさておき、気さくに話しかける桃果。
ミウラは桃矢と桃果の眼前で紙を広げた。それは世界地図だった。
落ち込んでいても始まらない。桃矢は、逃げ出すための情報収集のつもりで覗き込む。

「ここです」
ミウラが指し示す場所は、赤道からちょっとだけ離れた海。――の真ん中にある、針で突いた傷のような小さい島。
「えっ！　ええーっ！　島国？」

頭を抱えたのは桃矢。ありとあらゆる大陸や半島や島から離れるだけ離れている。まさに絶海の孤島。陸、海、空路での単独脱出は不可能。

「拡大図はこう」
ミウラがもう一枚の地図を広げる。
ほぼ円形の島から西に一本、岬が張り出している。一言で表現するならフライパン。
それと柄の延長線上に小さな島が一つ。

「こっ、これは……屋久島より小さい？」
桃果も会話に窮し、眉をひそめていた。
「でもさ、なんでこんなへんぴな……もとい。ちいさな国の姫様を旧日本軍が？」
桃矢、当然の疑問である。

「真の目的は計りかねますが、我が国で戦局に係わる何かを発見したらしく――あっ！　見えてきました。あれがゼクトールです！」

ミウラが、顔を輝かせながら窓の外を指さす。桃矢は、指された景色を見るついでにミウラの表情を盗み見た。故郷を見るミウラ。子供ぽい顔をしている。

「うわっ、ちょーすごっ！　ヤバイくらい綺麗！」

桃果の歓声に、桃矢ものぞき込む。

コバルトブルーの中にエメラルドをちりばめた海。そこに浮かぶ緑の島。

陽の中の陽、光の景色が広がっている。

「美しい！」

あまりにも現実離れした美しい景色がどこまでも続いていた。

結局、ゼクトール本国に降り立ったのは、拉致られてから一日以上経ってからだった。

3．コバルトの海（後書き）

お気に召しましたら、軽～く評価ボタンを押してください。
軽～く。

4. 水着

底抜けに青い空。暖かいを通り越した、あきらかに熱帯性の気候。やんわりとした風に漂ってくるのは潮の匂い。

暑い。いや熱い。

ギラギラという擬音でしか表現できない、強力かつ容赦ない太陽光が恨めしい。緩やかな風が吹いてなかったら、とても立ってなどいられない。

空港は立派だった。

旧日本軍が作ったという、大型旅客機も発着可能な滑走路が一本。一本だけ伸びていた。

随分金がかかっているらしく、夜間発着も可能とのこと。

後は小屋が一棟と、てっぺんに吹き流しを一本揚げた管制塔がそびえ立っているだけ。

移動時間と時差の加減もあるのか、ここゼクトールは、朝の早い時間帯だった。

「ビバ、南海の孤島」

桃矢の歓声は生ぬるかった。ご陽気な単語に反比例して、勢いがない。

一日程度の再会なのに、久しぶり感の地面。よく日に焼けたコンクリートの感触を通学靴の底に感じながら、桃矢は大地を踏みしめた。

目の前に広がるこの光景。桃矢は似たような光景を何度かテレビで見た記憶がある。

外国から要人を迎えるときの、あの光景。あの式典。
出迎えの音楽隊が、ゼクトール国歌らしき、のんびりした調べを演奏している。

「常夏のー、国、ゼクトぉルぅー。南海ぃにぃー、浮かぶ島ぁー」
桃果が即興で詩を乗っける。四拍子で構成された実に平和な国歌だ。とても桃果が主張するような戦闘国家には見えない。

が、なにか違和感を感じる。

「なに？　やっぱ暑いから？」
楽団員は、全員女の子。中学生くらいか？　まあ、それはそれでアリだろう。
問題としているのは服装だ。上半身は白いセーラー服。まあ、これはこれでアリだろう。
解せないのは下半身。スカートもズボンもはいてない。
全員ハイレグの白い水着。……と、白のブーツ。

この地方の風習なのかもしれない。なにせ暑いからね……周りは海だし。
桃矢は結論づけた。これは南国ゼクトールの風習だ！
ハワイの空港で出迎えてくれるお姉ちゃんは上半身ビキニの水着じゃないか。なら下半身水着の国だってあるはず。ワンピースの水着ってのが健康的じゃないか！　いやぁ、ゼクトールってさすが南国だなぁ！

……なわきゃねえだろ！

桃果はどう受け取ったのだろうか？　後ろを歩いているはずの桃果を振り向く。

目が……、桃果の目がわずかに細められていた。細めた猫の目に似た形。
だめだ！　完全にゼクトールを気に入っている。
これは……桃果を置いて、一人脱出という選択肢も。……あるいは。
そんな風に考えていたら、桃果が手を握ってきた。
色っぽい握り方ではない。あえて言うなら手錠的な握り方。
桃果の顔を覗き込んだ。逃げたらコロスと彼女の目が言ってる。
「ゼクトール王宮へ向かいます。この国の重鎮達が、首を長くしてトーヤ様をお待ちいたしております」
よぼよぼの爺様が運転する、オールドファッションのリンカーンに押し込まれる桃矢達。
沿道には大勢の人が繰り出していた。手に手にゼクトール国旗と日の丸が握られ、ハゲシク振られている。熱烈な歓迎である。
桃果は嬉しそうに手を振り返していた。
「ほら、桃矢。ボサッとしてないで手を振ってあげなさい！」
気乗りしない表情で手を振る桃矢。ボーとしていた桃矢だが、ふと気付いた。
道々で旗を振る人々。日本の夏とそう変わりない服装。桃矢と同世代の女の子が、黄色い歓声を上げている。一人や二人ではない。三桁に上る数だ。
桃矢の集中力が、ピーキーかつクイックレスポンスで上昇した。あらためてよく観察すると、グラマラスな大人のお姉さんも多数混じっておられた。

旗を振るたび、揺れるバスト。ワンアクションごと、くねるヒップ。柔らかそうな太股。
……いや、健康的な意味で。
水着を着ている女の子はいないが、みな薄着である。暑いから当然だ。
俄然、男前の顔をする桃矢。手の振りも、きびきびとしたものに変わる。
……いや、健康的な意味で。
視線を感じて振り返ると、桃果のニヤニヤ笑いがあった。
これはまずい！　このままでは、しめしがつかない。
「いや、ほら、別に国王になることを認めた訳じゃないからね。だってこんなに歓迎されて、いい加減な態度できないでしょ？　いや、健康的な意味で！」
たまらず桃果が噴きだした。桃矢の沽券が回復するのは、遠い未来のようだ。

一分二十五秒のドライブが終わり、運転手がプルプルした手でドアを開ける。
降り立った先に構えているのは白亜の――。
「ここがゼクトール王宮です」
「まぁ、予想は付いていたんだよな」
ミウラが案内してくれたのは、築五十五年、木造二階建て。

白の剥げかけたペンキを基調とした外観に、いろいろと飾り的な装飾が施されている。
田舎の村役場より、よっぽど金のかかった建物だ。
ありていに言って、桃矢が住んでいた土地の市役所より劣る。

「間を取って町役場だな」
桃矢は、なにもバッキンガム宮殿やノイシュヴァンシュタイン城を想像していたわけではない。が、やや撫で肩姿勢で歩いていた。

「お城ってイメージじゃないわよね？」
桃果も、同じことを言いながらミウラの後について歩いていく。

「狭いながら、王宮には美術館や図書室、卓球場などが入っております。もちろん、各行政機関も全て収納しています」
「卓球場の意味が解りませんが、なるほど立派ですね」
「ありがとうございます。では、ゼクトール政府の重鎮達を紹介いたしましょう！」

王宮玄関先で桃矢達を出迎えたのは、水着姿の九人の女の子達。
「えーと……」

言葉に詰まっているのは桃矢だけではない。桃果も黙り込んでいる。むしろ、声を出せただけまだましである。さすが男の子。

ゼクトールは混血が進んでいるのだろう。いろんな人種が混じっているようだ。
その中で、黒縁眼鏡をかけた、一番背の高いお姉さんが一歩進み出た。

「わたくしはジェベル・オルブリヒト。日本では総理大臣に当たる宰相を勤めさせていただいております。トーヤ様は戴冠式を済ませておいでではありませんが、事は急を要します。トーヤ様のお立場は、これ以後、事実上の国王であらせられます」

明るいブラウンの髪を後ろに流した大人のお姉さん。透けるように肌が白い女の人。背が高く胸が大きい。くびれたウエストに張りのある腰部。目の置き場にやたら困る。

「よろしくお願いいたします、トーヤ様」

「あ、よろしく願いいたします」

後頭部をガリガリ掻く桃矢。アガっているのは火を見るより明らか。

しかし、一国の首相にしては若すぎないか？　若作りをしているようには見えないが。

「失礼ですが、ジェベルさんはおいくつですか？」

堂々と女性に年を聞く桃矢。

「二十四才です」

にこやかに答えるジェベル。やはり若い。若すぎる。

これを機にしてゼクトール政府重鎮達の自己紹介が始まった。

「国土交通委員長のエレカ・フリフラ！　今年で十八っス……です！」

ショートの黒髪と漆黒の瞳が白い肌に映える。

つぎの子は、無言で頭を下げただけだった。青白い髪がゆらりと揺れる。

「あ、この子は文部科学委員長のミラ・ロコモコ。十七才。ほんと無口で困るよね」

ミラの頭を平手ではたくエレカ。はたかれているのに、まったく無関心顔のミラだった。

「農務委員長を拝命しました、ノア・モフモフ、十三才です」

長く垂らした三つ編みが可愛い。身長も胸も小さいながら引き締まった体つき。

「ががが、外務委員長のサラ・プワプワ、十三才です。よよよ、よろしくお願いします」

おかっぱ頭で、接触感覚が柔らかそうなイメージの幼児体型。

以後、十八歳の商務委員長ジムル。十六歳の財務委員長マープル。十五歳の法務委員長アムル、と続いていく。

ニコニコしている桃矢だが、実のところ、内心、ものすごい疑念が渦巻いている。

居並ぶ委員長達の共通点を桃矢は発見したのだ。多分、桃果も気付いているだろう。しかしこれほど聞きにくいものはない。

「そして最後に、国防委員長を務めさせていただきます、ミウラ・ヴァイツ。十七才です」

ミウラの挨拶がとどめとなった。桃矢は、たまらず疑問を口にした。

「ゼクトールの閣僚には、年齢や性別に制限があるのですか？」

九人の委員長達、すべてが女子。宰相のジェベルが最年長。でも二十四才。

ＯＬが一人。高校生が五人。中学生が三人。平均年齢、十六・八才。

つーか、日本の法律では、ジェベル以外全員未成年。

彼女たちが自分に仕えてくれる。嬉しい！　でも不安！

低い次元の狭間で揺れる桃矢であった。

4．水着（後書き）

次回、5．最終防衛ライン。
なにが最終防衛ラインなのかw

誤字脱字の指摘・感想お待ちしています。
僕カノの感想もお待ちしてま～す！

5．最終防衛ライン

「疑問はごもっとも」
艶然と笑うジェベル。意味無くデへへ笑いを返す桃矢。桃果に足を踏まれた。

「ゼクトールは、主立った産業のない小さな島国です。小島嶼開発途上国として、国連に認定されています。政府財源は、国民の出稼ぎによる送金に頼っている次第です」
「だから、なんで若い子ばかりが……あ！」
あることに気がついた桃矢。そういえば、沿道で迎えてくれた国民の皆様方。全て女性ではなかったか？

「まさか？」
仮説が確信に変わる瞬間。
「まさか成人男子全員が、海外へ出稼ぎに出ている……とか？」
いいところを奪い去ったのは桃果。彼女の顔に張り付いた笑みが、紙のように薄っぺらい。

「その通りです。我がゼクトールでは、一家を支えるのは男の仕事。そしてゼクトールには主立った輸出産業がございません。ゆえに労働可能な男子全員、家族を残して諸外国へ出稼ぎに出向いています。ゼクトール人は実直勤勉、そして忠実な国民性で有名なので、引く手あまた。最近は主に中東方面での雇用が増えています」
ジェベルは肯定した。

他の委員長達も頷いている。彼女たちの父や兄は、遠い異国で身を粉にして働いているのだ。そして、年老いた祖父母のため、ある者は妻や子供達のために、またあるものは母や妹たちに、稼ぎのほ

とんどを送っているという。

「立派ね！　あたしの両親なんか、恥ずかしくて語れないわね。家族のために歯を食いしばる。美しいわ！」

自分の世界に入り込む桃果。遠い一点を見つめている。

「まあ……、ここよりは美味しものや面白いものがあるので、それほど歯は食いしばっていないようですが」

「美しいわ！」

現実から目をそらし、オリジナルストーリーを完成させる桃果であった。

「そしてもう一つ。ゼクトールの政治的慣習が関係します」

ジェベルの次の言葉を目で促す桃矢。

「ゼクトールの政治体系は、絶対君主制。王の権限は絶大です。よって、ゼクトールにおける閣僚とは、王の指示の元、各部門での実行機関にすぎません。つまり委員会。そして、国王が亡くなった場合、政治家と呼ばれる者達は、一斉に引退します」

大昔、日本や中国では、大王が死ぬと側近の者や使用人が殉職させられる。そんな話を思い出した桃矢。あれは大昔の風習。

ジェベルは言葉を句切ったまま、桃矢と桃果を交互に見ている。二人の理解度を測っているようだ。

二人ともここまで付いてきていると判断したのだろう。ジェベルは、話を続けた。

「貴族と名乗るのはおこがましいですが、私たちは家ごとに各委員会を受け持っています。そして代々、長の地位を受け継いでいるのです。たとえば、我がオルブリヒト家が全委員会をまとめる、いわば委員会会長の家柄。そしてミウラのヴァイツ家が戦人の長、マープルのミートン家が王家の倉を預かる家柄」

桃矢は、再び日本の歴史をひもといていた。大和朝廷の時代、家々によって、ある程度担当する役職が決められていたような？

いつものように桃果に視線を向ける桃矢。くりっとした可愛い目を見開いてジェベルの説明を聞き入っていた。桃果も驚いているようだった。

違う！　彼女は、初めて聞くシステムとして驚いているのだ！

桃矢は、桃果は歴史がからきし駄目だったのを思い出した。

「国民総所得の低いゼクトールでは働き出す年齢が低いため、法律では十三才で成年と見なされます。ついでに言いますと、わたくしの祖々母は、十四才で宰相に就任したという経歴の持ち主です」

「ま、まあ、国の事情だよね」

一つの謎は解けた。のこるはもう一つの謎。

後で聞きにくいこと。いまなら勢いで聞ける気がする。

「その辺は理解できましたが、……みなさん水着なのは何故？」

漆黒の水着を着ているジェベル。あきらかにサイズが一つ小さい。砲弾型に突き出したバストと相まって、勝手に視線が首下に移動するという男の性（さが）に、さっきから桃矢は苦しんでいるのだ。

それだけならまだしも、タイトミニスーツを着込んだミウラ以外、同年代の女の子が下半身水着姿である。何人かはハイレグだ。おまけにゼクトール女性は、美人ぞろいでナイスバディ！

間違いを起こしそうでとても怖い。それ以前に桃果の仕置きが怖い。

不可侵の領域へ足を踏み込んだ感の桃矢。いろんな意味で緊張している。

「桃矢、鼻と唇の間が長くなってるわよ」

桃矢が鼻に手を当てる。それを見て、またもや笑いを堪える桃果。

「これはゼクトールの風習です」

ジェベルの答えは簡潔だった。

「元々は宗教上の理由からですが、王が変わると、みな一斉に衣を替えるのです。制服のデザイン選択は、新しい王にまかされます。つまり王の好みでいろんなタイプの制服が生まれるのです。トーヤ様の代に変わった今、制服もトーヤ様の趣向に合わせて替えるのが習わしです」

「え！　じゃ、その水着は先王の趣味？」

にこにこ笑いながら頷くジェベルの水着が黒光りしていて眩しい。

「先々代は、上がセーラーで下がマイクロミニという制服を採用されていたそうです」

遠き過去に、勇者を見る桃矢。

「さて、トーヤ様におかれましては、どのようなデザインがお好みでしょうか？　全員の分を揃えるには時間がかかります。お話ついでに、今ここでお伺いしたいのですが……」

ジェベルの言葉に、桃矢は唾を飲み込んだ。

「ど、どのようなモノでも？」

これはアレだ。服という文化を手に入れた代わりに失った物を――。

「王の命令は絶対です。死ねと言われれば、喜んでこの命、捧げましょう」

ミウラが直立不動の姿勢で宣誓する。後ろに控える家臣団の女の子達も首肯してる。

「たとえば、……この国、暑いしね。……自分の好みというよりは、みんなの快適性を第一に考えてるんだけど……いやぁ暑いよね？熱帯だし。……そこで提案なんだけど……」
「なんなりとご用命下さい！」
真剣に受けるミウラ。きりりとした眉がりりしい。

「それじゃ、上半身裸にな――」
そこから先は、桃果にネックブリーカーをかけられたので喋ることができなかった。

「乳房を出すのは恥ずかしい事ですが、王の命令とあれば仕方ありません。制服代が安上がりで済むのが救いです」
平然とした面持ちで肩から水着をずらしだすミウラ。ジェベルやノア達も頬を朱に染めながら、次々と肩を出しはじめた。

「ストップ！　ストップです！　命令です、王の訂正命令！　今のはナシ！」
ネックブリーカーを解かれた桃矢。解かれた意を解し、必死で訂正の弁を振るう。
「今のままで変更無し！　僕と先代国王は趣味が一緒みたいですぅっ！」

泣きながら、しかし、ギリギリのラインだけは守り通した桃矢であった。

5．最終防衛ライン（後書き）

次回、６話．記念写真

かみんぐすぅーん！

明日、昼に上げられそうだ。

6．記念写真

「このままでよろしいのですか？　トーヤ様！」
大きな声が閣僚の中から上がった。フリル付きの赤い水着が可愛い十六才の財務委員長、マープルである。
「ありがとうございますトーヤ様。財務を預かる者として心よりお礼申し上げます！」
両手を祈りの形に組み、目から涙を溢れさせるマープル。何度も頭を垂れる。

「え、泣くこと？　そんなに今の水着が気にいっ――」
桃矢の足を桃果が強く踏んだ。
「財務委員長が感謝することと言えばお金の話ですよね？」
桃果が肩で桃矢を押しのけて前に出た。笑顔のまま、しかし眉がつり上がっている。何かに気がついたようだ。

「制服を一時に何百着も替えるには、まとまった金額が必要よね？」
「あ、そうか！」
そこまで言われて桃矢も気付いた。桃果の後ろで。

気付くのが遅かった。気の付かない男と思われるかもしれないと軽い後悔が立つ。
それにしても、桃果は異様に頭の回転が速い。……桃矢の頭を押さえるため限定だが。

「桃矢は……いえ、桃矢様は、無駄に財政を支出するなと言われているのです」
「トーヤ様！」
花が咲いたような笑顔を浮かべるマープル。

そして口々に謝意を唱える女の子達……もとい、各閣僚。桃矢、モテモテである。
桃果の機転が桃矢の面目を立たせた。感謝！　した瞬間を計ったかのように、ちらりと
振り返る桃果。目が……イタチ目をした瞳に「貸し」の二文字が浮かんでいた。

引き替えに、桃矢は女の子……もとい、全閣僚の信任を得たと考えればいいはずだが、それにしては借り入れた金額が大きすぎる気がする。

「ではみなさん、せめて胸の谷間だけでもお出ししましょうか？」
ジェベルは胸に手を掛けたままだ。真剣な顔をして同僚達に相談を持ちかけた。

「谷間かー、……ジェベルさんに比べられると、ちょっと辛いんだよなー！」
国土交通委員長のエレカが早速行動に出た。ボーイッシュな彼女。蒼い競泳水着の胸元に手を乱暴に差し込んで、ごそごそしている。何をつかんでいるのだろうか？

「……」
無言でペールブルーの水着をはだけていくミラ。マープルの言葉を額面通り受け取ったのだろう。薄水色の目が虚ろなのは動揺のせいか、それとも元々の性格によるのか？

「トーヤ様の命とあらばこのミウラ、軍人として一命をも投げ打ちましょう！」
顔を朱に染め、勢いよく胸元をはだけるミウラ。彼女は、十七才

とは思えない質量感の持ち主だった。

あっという間に中高一貫校の女子更衣室と化した国王執務室。
どこの神様かわかりませんがありがとうございます。桃矢は神の奇跡に感謝し、一生ついていくことを誓った。
「いえ、それほどでも」
「え？」
桃矢の思考を読んだとしかいえないタイミングの相づち。いったい誰が……。

「待ちなさーいっ！」
大声を張り上げたのは桃果。神の威光を地べたに引きずり下ろす悪魔の咆吼！
顔を赤らめた者、自慢顔やどこ吹く風の者、全てが脱衣を中断。桃果に視線を向けた。

「国王がいつ、ぱいぱいを放り出せと言いましたか？」
怖いくらいに平常で冷徹な声を出す桃果。

「ふんっ！　トーヤ様のお付きだかなんだか知らねぇが、桃果様？あんた、胸の谷間もねぇ小娘なのかぃ？」
可愛い谷間を放り出したまま、詰め寄るエレカ。腕を前に組んで寄せ、強調している。

「ふっ！　よくいるのよね。胸を放り出すだけが色気と勘違いしてる小娘って」
両手の平を上に向け、ヤレヤレのポーズを作る桃果。
「んだとぉー！」
袖まくりのポーズで詰め寄ろうとしたエレカ。それを押しとどめるミウラ。

桃果はエレカを挑発するように、芝居っけたっぷりに話し始めた。
「あらあら、見せた後はどうするの？　それ以上、なにを見せるの？」
「何って……そ、そそそ、それをここで言わせるのか？」
額に汗を浮かべるエレカ。言葉に詰まる。
言ってくれ、その単語を！　神よ、魔神に負けるな！　神に祈る桃矢であった。

「お下品ね。おほほほほ！」
桃果は芝居気たっぷりに笑いながらクルクルと回転。ビシリと人差し指をエレカに突きつけて回転を止めた。

「見せてしまえばお終い。見せずに魅せる、という意味が解る？
桃矢陛下は脱げとはおっしゃってない。その意味、わかるわよね？
男と女の高等な遊びよ。まさか、エレカ委員長ほどの女性が、桃矢国王陛下をそこら辺の男と同列に扱ってないわよね？」
出来の悪い生徒に教える女教師よろしく、人差し指を立て、ゆっくりと左右に振る桃果。

「な、なるほど！　わたしは恐れ多くもトーヤ様を見くびっていたことに……くっ！」
エレカは力なく床に膝をつき、うなだれる。見かけや態度に似合わぬ素直な性格だった。
一方、桃矢も神の無力さに絶望し、背中を丸めてうなだれていた。

「ハイハイ、みんな元通り水着をなおして！　規律の乱れは服装から。注意しましょう！」
着衣を乱す音と直す音。同じ衣擦れの音であるのに、あまりに大きな違い。自分の思考力が回復していく様に無情を感じる桃矢。ま

た一歩大人になった気がした。

そして、大人になった桃矢は開き直っていた。

「もう一つ疑問があるんですが」

ものはついで。聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥という諺が、桃矢の頭の中をぐるぐると舞っている。

「これも最初から思ってたんですが、みなさん、なんで日本語を流暢に話せるんですか？」

「そういえばそうね。いままで気にもかけなかったけど」

剛気な桃果はさておき、ここまでの会話、全て日本語である。

「トーヤ様が次期国王と承認された時、ゼクトールの第二公用語を日本語に制定したのです。それからの我らは、一日二十四時間を二十五時間の猛勉強をして日本語をマスター致しました」

皆、一様に胸を反る。ジェベルはもとより全委員長が胸を突き出す。九対十八房の誇り。

壮観である。

神はまだ、桃果に滅ぼされたわけではなかった。桃矢は神の無事に安堵した。

「わたくしは無事です。どうかご安心を」

今、桃矢は確かに神の声を聞いた。

「ではこれより、新政権誕生による記念写真を撮りまーす！　その後はみんなそろって朝食ですよー！　はい並んで並んで！」

ジェベルの号令の元、呆然とする桃矢を中心として、わらわらと集合する委員長達。

ちゃっかりと桃矢の隣に位置し、爆笑中の桃花を筆頭に、みんな笑顔で写真に収まったのだった。

6．記念写真（後書き）

次回、「王座」

王の権限とは？

王の栄光とは？

…「玉座」になるかもしれない。

7．王座

「えーと……」
桃矢が狼狽えていた。

映画やテレビでよく見る、南国情緒たっぷりのシーン。
天井で、厳かに回転する巨大なプロペラ。白いテーブルクロスが眩しい長テーブル。色とりどりの花や溢れんばかりの南国フルーツを盛った美しい器。
長テーブルの両脇に少女達……もとい、何らかの閣僚達が、何らかの順に、並んで座っている。

一人ずつ、スク水にエプロン姿の愛らしい少女が……もとい、給仕がついていた。
面食らった感の桃矢であるが、国王なんだから当然上座。不満そうにしている桃果が次の座。
「ジェベルさん、これって朝ゴハンですよね？」
ナイフとフォークを持った桃矢。これから朝食メニューを平らげようというのだ。

「はい、なにか不手際でもございましたでしょうか？」
「いや、その、量がね……」
顔を見合わす桃矢と桃果。そう、量が問題だった。

鉄板の上で、音を立てて蒸気をあげる、広辞苑のような六百グラムステーキ。の、上に置かれた目玉焼き五個。の、上からかけられた濃厚なデミグラスソース・マッシュルーム入り。ギラギラとしたラードが自己主張している。

桃矢は線が細いくせに燃費が悪い方だ。でも、朝からこれはいくらなんでも無理だろう。
「こんなのがゼクトール王の食事なんですか？」
げっそりとした桃矢がジェベルにたずねる。

突然、大きな音がしてドアが開いた。驚いてドアの方を見る桃矢
護衛兵の女の子達（競泳水着姿）が泣きそうになってしがみつくのを歯牙にもかけず、突進してくる巨大な肉塊が二つ。

「こんなので申し訳ございませんっ！　トーヤ様ぁっ！」
一人はガラガラ声の老人だった。二メートルをかるく超える巨漢。ちりぢりの黒髪を肩まで垂らしている。顎髭が濃くて長い。ひよこのアップリケがついた白いエプロンをつけていた。

「本来、八百グラムステーキに卵十個の所、たった五個で調理してしまいました！」
テンガロンハットを被ったもう一人の老人が、膝をついた。二メートルにわずか足りない長身。金髪でボブカット。立派な髭を鼻の下に蓄えている。こちらの老人はピンクに白いフリル付きのエプロン姿だ。

抱きついて爺ちゃんの突進を止めている水着姿の少女、……もとい、衛兵達を、小さな子供を扱うかのように、二老人は軽々と抱き上げて下ろした。実際、衛兵は子供だったが。
二人とも筋肉が異様に発達している。そして見上げるような大男。

「ブロスにハセン。二名ともそこへなおれ。トーヤ様に代わり成敗してくれる」
ミウラが、ワンアクションで拳銃を引き抜く。フルオートが握られていた。

桃矢はもとより桃果まで、突然の出来事に棒立ちだった。

「処罰は覚悟の上！　我ら王室の調理を預かって十余年。前王に請われるまま、当初から予算オーバーを繰り返して参りました。すでに王室維持費が尽きましてございます！」

ごつい両手を祈りの形に組んで、頭を下げるキングコングのような黒髪の巨人。

「どうか、どうかトーヤ様におかれましては、毎朝のステーキを半分の四百グラムにぃ！」

テンガロンハットの巨大コックが額を床にこすりつける。

半分でも厳しい！　正反対の意味で。

と、ここで桃矢の額、星形のホクロに嫌な色の光が走った。

「いやいやいや、ちょっと待って！　朝がステーキなら、昼ゴハンはどうなるの？」

ある意味、興味が湧いた桃矢。怖い物見たさである。

「本日は一皿料理でして……。トリュフのスライスで覆いつくしたフォアグラのブロック入りチーズとバターの濃厚クリーム肉厚ベーコンカルボナーラ太パスタを大皿で！」

桃矢の胃が防御反応をした。まだ食べてないのに、胃に膜が張った感じがしたのだ。

「ちなみに、今夜のメニューは、ヘルシーな鶏肉をラード油で揚げた――」

「夜はいいわ！　聞くだけで胸焼けしてきたから！」

両手を振ってメニュー解説を制止する桃果。彼女も王室の食生活に厳しさを感じたようで、眉間に皺を寄せている。

「ひょっとして、前国王がお亡くなりになった原因って、糖尿ですか？」
桃矢が小声で、銃を構えるミウラに聞いた。
「それも原因の一つですが、……その他に高血圧と肝硬変と腎臓結石と心臓動脈梗塞と大静脈瘤と脳梗塞を併発されて……。我がゼクトールの田舎医学ではどうしようもなく……」
「いやいやいや、医療先進国でもそれは助からないよ。つーか、誰も食生活を改善させなかったの？」
血が滲むほど唇を噛みしめるミウラ。ジェベルはじめ各閣僚もうつむいている。
「それは……許されないことです」
やはり口を開いたのはミウラ。
「王の命令は絶対です！　まして王家の伝統ある風習。我ら臣民に、口出しなどできません。我らの生与奪権は王にあり！」
口を真一文字に結ぶミウラ。目に危ない光が灯る。
「部下の責任はわたしの責任。ここはわたくしが！」
いうなり自らのこめかみに拳銃を向けるミウラ。閣僚達は誰も止めようとしない。
そして、銃が火を噴いた。
「危ないって！」
間一髪。桃矢がミウラの腕に飛びついていた。おかげで、狙いのはずれた銃弾が壁にめり込むだけですんだ。桃矢の口元が引きつっている。

「我らの忠誠は犬のごとし！　王の言葉は、神のご意志なり！」
その場に居合わせた者で、桃矢と桃果を除くもの全てが声を揃えた。国の標語なのだろう。それにしてもヤバイ連中だ。

桃矢は、どうしていいかわからなくなって、視線を桃果に向けた。助けを求めるかのように桃矢を見ている桃果がいた。

「恐るべき忠誠心ね！」
桃果の漏らした言葉。桃矢は、ハタと気づいた。そして、こう提案した。
「その伝統料理を出すのは、国の記念日だけにしませんか？　例えば、建国記念日だとか誕生日だとか」
「ゼクトール王である桃矢様による、記念すべき初めてのまともなご命令よ！」
桃矢の提案を勘のいい桃果が補足する。

桃果が勝手に抜き払った伝家の魔剣、いや、宝刀・国王命令。
ミウラ達は、魔法の呪文にひれ伏した。
虎の威を借る狐。桃矢はすぐにその故事を思い出した。が、口にしないほうがいいという知恵が備わっていたのは幸いであった。

「材料の運搬費だけでお金がかかりそうだもんね。それに、その方が王家の伝統らしくっていいよ。もったいぶる方が、格式も上がるってもんだ」
二人の提案に、ゼクトール人達が驚いている。一様に口をOの字にして固まっていた。

言い過ぎてしまったかと思い、またまた視線を桃果にあわわせる桃矢。桃果は、堂々としていろと、目で答えてきた。

案の定。
「やはり、トーヤ様は王の器！」
「ゼクトールの国庫、ならびに国民の生活をこれほどまでに心配していただけるとは！」
閣僚達は勝手に勘違いしてくれた。
とても単純で、すぐに人を信じる正直者。おまけに良い方へ良い方へと考えるポジティブ指向。

食費だけでこの感謝。桃矢は大げさすぎると思ったが、先程の標語を思い出し、ゼクトールではこんなものなのだろうと一人で合点していた。
なんにせよ、ステーキ一枚で……。
「あ、そうだ！」
桃矢の頭上で豆電球が輝いた。
「このギザサイズステーキなんだけど、残すのももったいないからみんなで食べようよ。僕が切り分けるから、みんな、お皿を持ってきて」
ナイフとフォークを手にした桃矢。言ったそばから早速切り分けている。

「トーヤ様っ！」
ミウラが叫んだ。
「え？　はい、すんません！」
とりあえず謝る桃矢。なぜ怒られたのか、理由がわからない。
「我らのような下々の者に、ご自身の糧を自らお与え下さるとは！」
びしりと敬礼しているミウラ。直立不動で涙を堪えている各委員長達。
長テーブルは感動の嵐に包まれていた。桃矢は口を開けっぱなしにしている。

しかし、人に感謝されるのは気持ちのいいもの。それにちょっと自慢。桃矢は頬に熱い血が通うのを感じながら、桃果に目を向けた。

桃果も桃矢を見ていた。笑って桃矢を見ていた。桃果とっておきの営業スマイルだった。

桃果がこの笑みを浮かべるとき。それは打算ずくの時。何かある。そこまで考えが及び、桃果の真意に気付いた。桃矢の脳裏に、ある入り口に立っているイメージが浮かぶ。

王座への入り口。

既成事実として、桃矢は自分をゼクトールの王と認める発言をしてしまっていた。

自らの手で、よりいっそう後戻りしにくくしてしまった！

桃矢は、自分の顔色が変わっていくのを実感した。それは、桃果が腹を抱えて笑っている事からも、うかがえるのだった。

7．王座（後書き）

玉座…王座…うーん…。

次回、8．神よ！

物語は一気に宗教問題へ（嘘）！

仮眠具すーん！

8．神よ！

「ゼクトールは今、様々な問題を抱えております。それら諸問題を解決するためにも、この国には王が必要なのです」
残っているのは、今喋っているジェベルと、後ろで控えるミウラだけだった。

ステーキ問題の後、各閣僚は、おのが仕事へと散っていった。
授業が始まったのでいそいそと教室へ向かう女子校生を連想させるその様は、ゼクトールの将来をそこはかとなく不安にさせるものだった。

桃矢にだってわかる。常識的な問題。急な政変である。通常の仕事以上に緊急の仕事が降って湧いたのだ。そして、国を運営する新しいスタッフは、慣れない上に経験も浅い。おまけに若すぎる。一分一秒が惜しいはずだ。

新しい国王に、国民はお祭り騒ぎで歓迎していた。めでたいことだ。政府もそれを奨励している。
桃矢はちょっぴり心苦しかった。一泊二日の王では、国民を騙すようなものだからだ。

「国民は、トーヤ様を新国王としてお迎え致しましたことを心の底よりお喜び申し上げております。これは紛れもない真実です。しかしまた、国民は、王家に対して神聖な格式を求めるものでございます」
ジェベルは、眼鏡の位置を指で直した。
「なんか、授業受けてるみたいね」

桃果の感想は桃矢の感想でもある。
年齢と風貌からいって、新任の女教師で通りそうなジェベル。……水着だが。
一方、学生服のままの桃矢と桃果。こちらはまぎれもなく現役学生である。

「即位式、つまり戴冠式を迎えて、初めて王となられるもの。逆に言えば、戴冠式を迎えなければ王として認められない、ということでもあります」
今の所、なんか意味深な感じがする。思わずノートに取りたくなってしまった桃矢である。

「時間は貴重です。長旅でお疲れのところ真に申しわけございませんが、トーヤ様におかれましては、これより即位の式を受けていただきます」
ますます、逃げづらくなってしまった。第三者的立場の桃果は、らんらんと目を輝かせている。異常なまでの乗り気である。天井を仰ぐ桃矢。

「なんつーか、こう……神に祈りたい心境になってきたんですが」
桃矢が呟く。ミウラとジェベルは計ったように互いの顔を見合わせた。
「それはちょうどよろしゅうございます」
ジェベルが慈母のような笑みを浮かべた。何がちょうど良いのかわからないが、美人が自分に笑顔を向けてくれるのは男として嬉しい。
「王位を授ける役は、ゼクトールの国教であるヌル教の神官長です。これから向かう先ですので、ついでにお祈りなされてはいかがでしょうか？」
桃矢の笑顔が固着する。今まで桃矢の側についていた神が、敵に

回った瞬間であった。

「ジェベル様。トーヤ様からみればヌル教は異教です。トーヤ様に宗旨替えを願うのも無茶なお話ではないでしょうか？」

ミウラが、その微妙な空気を感じ取った。方向が間違っているが。

「それは想定外でした。しかしこれは大問題です！」

桃矢の苦悩をよそに、別問題で考え込む二人の麗しき乙女。自分のことで悩んでくれる美女二人という構図も、それはそれで、そそられるものがある。

そういえば、二日間限定だけど、この二人の生与奪権は自分にあるんだっけ――なんて嬉し恥ずかしな妄想が膨れあがってくる桃矢。ますます進退窮まってきた。

ああもうどうしたらよいですか神様？　って、神は敵だったし。

まてまて、僕は何処へ行こうとしているのか？　初心は何処へ行った？　しかし、この立ち位置を捨てたくない。

人、これを堂々巡りと呼ぶ。

悩んでいる桃矢に白い腕が伸び、揺さぶった。

「安心して、二人とも！　自由と生死を縛る強制をしないかぎり、日本人はどんな神様にだって順応できるという属性が、生まれながらにデフォルトされているのよ！」

桃矢の胸ぐらをつかんで引きずり回しながら、桃果は拳を天に突き上げる。脳を揺すられグダグダになっていく桃矢。

「あ、あの、桃果様！　神という存在は魂に直結するもので、そんなに簡単には……それより、トーヤ様をそんなぞんざいに扱っては！」

ハラハラしながら、及び腰で桃果を制止するジェベルとミウラ。

特に、唯一神を信奉する者にとって神とは、その辺の日本人が考えているような生半可な存在ではない。日本人が「神に誓って――」と言えばたいていの場合、嘘偽りを糊塗する代名詞となっているが、彼女らにとっては命を賭して守るための代名詞なのである。

ゼクトール人である彼女達にとって、宗教を変えることなどあり得ない。そして、万が一、信じる神を変えるということは、人生そのものが変わってしまう事。いや、それ以上の大事件なのである。

よって、桃果の言っていることは、彼女達にとって悪い冗談以外の何物でもない。

「じゃあ……。あたしなら、桃矢を表面上でも宗旨替えさせることができる。どうよ？」

言いながらも桃矢を揺さぶり続ける桃果。桃矢は、自分の脳がプルンプルン揺れているのを実感した。

「お願いいたします、桃果様！」

桃矢は、飛びそうな意識の中、最敬礼をするミウラとジェベルの姿を見たのだった。

8．神よ！（後書き）

次回、9．異空間感覚

ナニなナニ、登場の予定。

9．異空間感覚

「午後よりパレードが用意されております。それまでの時間に、済ませるべき儀式を済ませ、各方面の知識を仕入れていただきます」
ジェベルが、にこやかな顔でスケジュール帳をめくっていた。

車に揺られること三分。
制服（水着）に着替えたミウラとジェベル、それに桃果と桃矢の四人は、ゼクトール本島から突き出した岬の入り口に立っていた。フライパンの柄の付け根部分に相当する場所だ。
朝の光の中、白を基調とした南国情緒に溢れる古い建物がぽつぽつと建っている。どことなく古い遺跡を思わせる地域。

ゼクトールは、珊瑚礁が隆起してできた島。大地の色は白が基本にして特徴。だのに、この辺り、つまり神殿地域だけが「黒い土」で出来た大地だった。

もう一つ。たいした突起物のない地形が特徴のゼクトール島。この位置から西の海を眺めると、丸い水平線の彼方まで一望できる。

「なに？　この反則的な透明度！　海の底が見える！」
桃果が感嘆の声を上げ、バカみたいに笑っていた。
南国の景色に、実によく似合う笑顔。太陽は緯度の低い地域でこそ底力を発揮する。

明るい太陽と美しい海。
脳震盪を引きずってしまい、胃の中を一度は空にした桃矢だったか、気分は一発で晴れた。

空から見た珊瑚礁もすばらしかったが、間近で見る珊瑚礁の海もまた別格である。
真っ白な砂浜に縁取られた島。エメラルドで埋め尽くした海。半島部分の周囲だけが深い藍色に染まり、色の多様性を楽しませてくれる。

海からの潮風に少し混じったオイル臭が一点の曇りか……。
沖に浮かんでいるのは漁船だろうか？　すぐ側でイルカが三頭、並んでジャンプした。

「ついでですので、簡単なガイドなどいかがでしょうか？」
ミウラの機嫌が良い。美しい風景が彼女をそうさせるのだろう。きりっとした美少女バスガイドさんの観光案内。桃矢は一発で乗った。
「お願いします」

桃矢を見つめる桃果の白い目に気付いた様子もなく、ミウラが案内を始めた。
「まず、ゼクトール周辺海域の特長ですが、我が国経済水域を囲むかのように、流れの速い海流に取り巻かれております。そのため、動力のない船舶による往来は不可能。これが第二次大戦末期に日本軍と接触するまで、わが国が国際社会より隔離されていた理由の一つです。そして、ゼクトール周辺海域は、季節風や主とした海流から遠く離れています。風らしい風が吹くのは朝と夕方だけ。台風やハリケーンと呼ばれる大型の暴風雨は十年に一度、来るか来ないかです」

たしかに、それなりの高台なのに、風が吹いていない。桃矢の頭頂で、おさまりの悪い一本の毛が、わずかに揺れるだけの微風しか漂っていない。

「ゼクトール島の周囲は、珊瑚礁のため、世界でも例を見ない遠浅です。よって、大型船舶は進入不可能。おまけに、そこかしこにバリアリーフが存在し、上陸用舟艇でも座礁の危険性があります。つまり、本島に着岸できるのは小舟のみ。こういった事象が、国土防衛に一役買っています」

ミウラのガイドは、国防長官のものであった。「はぁ」としまりのない口で相づちをうつ桃矢。桃果が、また向こうを向いて肩を振るわせている。

「反面、大型漁船や連絡船なども接岸できない、というデメリットもありますが――」

ミウラが岬の先っぽを指さした。桃矢と桃果は遠い海域を見ることになる。

ゼクトール島を取り巻くエメラルドの海を割って、深いコバルト色の海が長く西に伸びている。それは海の中の川のように、遠くまで一直線に伸び、外洋の蒼に繋がっていた。

「色の濃い部分は水深が深いのです。何故こうなったかは、今もって解明されていませんが、ゼクトール本島に繋がる唯一の、海の回廊です。ここを抜けないと、桟橋や港に停泊できません。海上防衛はこの地域、一点に絞れます」

あまり興味のない話なので、何とか話題を変える算段はないものかと、桃矢はいつものごとく桃果に救いを求めた。

「海軍艦艇は？　もちろん高速艇よね？」

桃果は目を輝かしてミウラの防衛計画に聞き入っていた。……ので、諦めた。

「小型高速艇が三隻。常時この海域に展開されています。型は古いですが、整備回数を多く取っているので常に万全です」
うんうんとうなずく桃果。目が輝いている。

「それから、遠くに見えるあの島影」
遠く、海の道に少しかかるように、小さく黒い島が見える。かろうじて直角三角形をした島影が見て取れた。
「あれはミョーイ島と申しまして、漁業の補給基地になっております。本島から遠く離れた島です。おかげでゼクトールの経済排他的水域が広がっているのですが――」

ミウラの長い説明の途中、周囲が急に暗くなった。桃矢はそんな気がした。

桃矢一人がゆっくりと後ろを振り向く。視線を感じたのだった――。

9．異空間感覚（後書き）

次回、〇〇〇・ゼクトール

尖った視線にレッツゴー（死語）！

10．イルマ・ゼクトール

尖った視線だった。それでいて痛くもなければ冷たくもない。懐かしいような、非難されているような、なんとも不思議な感覚。

振り向いた先は、古いゼクトール様式の建物。正面が暗い口を開けていた。

闇の前に女の子が立っていた。年の頃、たぶん十才未満。……たぶん人間。

ゼクトール本来の民族衣装なのだろうか？　丈の長い原色の布が、そこかしこから垂れ下がった特殊なデザイン。それが異国情緒を醸し出している。

耳の脇を色つきの紐で縛り、前髪を揃えた長い黒髪。その頭頂で、おさまりの悪い毛が一房、揺れていた。

しかしその少女、肌の色が変わっている。青白い。

血の気が無いという表現は間違っている。「青白い」という色の肌なのだ。

その子がじっと桃矢を見つめている。特に怖いというわけではない。どちらかと言えば暖かい目。桃矢を呼んでいるような目だった。

大きくなったらすごい美人になるだろうな、などと、邪な事まで考えていた時――。

「これはイルマ様。御自らのお出迎え、誠に恐縮至極でございます」

横合いから声が湧いて出た。ジェベルが少女に気づいたのだ。

「イルマというのか、あの子は」

もう一度、イルマと呼ばれた少女に向き直る。イルマを含めて、三人の女性がこちらに向かって歩いてきた。三人――。
さっきまで一人でいたような……。

イルマは、後ろに年上の女官を二人連れていた。後ろに付き従う女官達は、イルマが身につけた民族衣装の簡略型を身につけていた。似たようなスタイルが三人並んでいることになる。

イルマは、桃矢の眼前で歩みを止めた。息づかいまで聞こえる距離だ。
入ってはいけない結界を破る緊張に、桃矢の体が震える。

身長差のため、桃矢を見上げる格好のイルマ。
「そのほうがトーヤか？」
イルマの地位がそうさせるのか、慇懃無礼なものの言い様だった。
「え、あ、はい。芦原桃矢です」
またなんか面倒なことに巻き込まれそうな予感がしたので、丁寧に答えておく。

「だんだん、低年齢化していくのね」
桃矢の意図を壊すかのような桃果の一言。
「年を気にするのは年寄りだけなのだ」
その一言に、イルマが噛みついた。噛みつかれたら噛み返すのが桃果である。

すーっと、桃果の手が伸びて、……あっさり結界を破る桃果。
イルマの頭をポンポンと軽くはたいた。殴るでもなく撫でるでもない微妙な力加減。
これに過激に反応すれば子供っぽく見られるだろう。ずるい手だ。

「気安く予に触ってはいけないのだ！」
長い袖を宙に舞わせ、邪険に桃果の手を振りはらうイルマ。子供であることを周囲に印象づける結果となった。

ジェベルが中に割ってはいる。
「紹介が遅れましたね。こちらはイルマ・フタフタ・ゼクトール様。御年九才。ゼクトールの国教であるヌル教の神官長であらせられます。若いながら、歴代神官長の中でも一・二を争うほどの能力をお持ちです」
「よしなにな！」
えらそうに腕を組んでふんぞり返った。握手など求めない。

営業用スマイルを浮かべた桃果が一歩前に出る。
「あたしの名は――」
「その方の名は聞かずともわかるのだ。騎旗桃果よ」
ズバリ名前を言い当てるイルマ。
「え、なんで桃果ちゃんの名を？」
びっくりする桃矢。その反応に対し、無邪気な笑顔を浮かべるイルマ。
「バカ桃矢！」
一方。桃果は、ものすごく嫌な顔をする。
「前もって連絡が行ってれば、わかることでしょ？　種のない奇跡なんてあるワケないし！」
肩をすくめる桃果。

「ひねた桃果と違って、トーヤ殿は素直だ。なかなかに良き反応をする。気に入ったのだ」
うって変わって、大人びた笑みを浮かべるイルマ。腹に一物を持つ女の笑みだ。

「ずいぶん背伸びしたお子チャマね。てか、強がらないと周りから子供扱いされるのね。幼いのに……不憫ねぇ」
イルマを哀れんだ目で見る桃果。桃矢には解っていた。その目は芝居だと。

「な、何を哀れんでおるのだ？　予は自分を不幸などと思ってはおらぬのだ！」
両手をバタバタと上下に激しく振り回すイルマ。ちょっと可愛い。

「ジェベルよ！　この緊急時にシロウトを巻き込んでどうするつもりなのだ？　ケティムは民間人だろうが外国人だろうが関係無しなのだ」
遠慮ない敵意がこもった視線を桃果に向けるイルマ。

「桃矢が即位すれば懸案も落ち着くんでしょ？　それよりケティム共和国がどうかしたの？」
桃果だって知っている国、ケティム共和国。
地図で見ると、ゼクトールのずっと北にある大きな国だ。

最近、海外からの投資も多く、経済的に伸び盛りの国。新聞にその名が載らない日はない。良くも悪くも、ケティム一国の動向が世界情勢を一変させるだろうと言われている。
人権擁護や自然保護はCクラス。だが、軍事においてはAクラス。核保有国でもある。
そのため日本はもとより、アメリカやロシア、EU諸国から中国、インドまで、刺激を避ける傾向にある。

「ジェベル、ミウラ、その方ら、まだ話をしてないのか？」
ジト目のイルマ。
「申し訳ありません」

受け流すジェベルと、目を合わせられないでいるミウラ。性格の違いが現れた。

ジェベルやミウラの対応からして、このイルマという少女、……神官長と言っていたが、地位は王に劣らぬ程のものらしい。

桃矢は苦手な世界史を思い出していた。宗教上の長、カトリックの教皇の権威は、ヨーロッパの皇帝や王よりも上の存在であること。

イルマは王を承認・任命する立場。教皇と同じ立場にある、と桃矢は踏んだ。

それはそれとして――。

「ジェベルさん、ひょっとしてゼクトールはケティムと揉めてるんじゃ……？」

桃矢は、難しくて嫌な展開を想像していた。

「ケティム共和国ね？　水上艦隊を多数所有してるわ。確か最近、空母を建造したわねぇ。通常型の潜水艦は二桁所有してるし、弾道ミサイルを積める攻撃型原潜も何隻か持ってるはずよ。海兵隊も持ってるし。そうそう、空軍の主力は、スホイ設計部が誇るマルチファイターのＳｕ２７。条件によってはステルス機でも落とせるって噂のヤツ」

桃矢の質問を遮る桃果。この辺は彼女の得意分野。スラスラとケティムの軍事情報を解説してみせる。

目を輝かす桃果。キラキラと顔が光っている。桃矢は、桃果の輝きを消したくなかった。だから、このまま話に流される事にした。

「む、なかなかやるではないか！」

イルマが桃果を見直した。桃矢は思う。それは早合点だと。

桃果が各国の軍備や兵器に詳しいのは知っている。しかし、興味のある方面だけ。しかも薄く浅く中途半端に。
それが証拠に、陸軍は全くの無知だ。陸軍は汗臭いから嫌い、というちゃんとした理由があるらしい。

「まあよい。めんどくさい話は、後ほどジェベルにでも聞くとよい。とっとと用事を済ますのだ。トーヤとミウラ、ついでに桃果の三人！　ついてくるがよい」
くるりと向きを変えるイルマ。女官にかしずかれてしずしずと歩いていく。

イルマは、桃矢達がついてくることを当然のようにして、宗教施設の中へ入っていったのだった。

１０．イルマ・ゼクトール（後書き）

次回、アンダー・ザ・グランド

ゼクトール王国、最深部へレッツゴー！

11．アンダー・ザ・グラウンド

「即位の儀には陽と陰、二つの儀式があるのだ。そこ！　よそ見して遅れるでない。神殿地下はラビリンス。迷子になると生きては出られないのだ」

暗闇の中、イルマの持つランタンの光だけが頼りだった。

外からは想像もできない長くて複雑な回廊を、下へ下へと降りていく。石造りであろう、すり切れた階段を下りた先。桃果の愚痴を聞き飽きた頃、材質不明の巨大な扉の前に出た。

馴染みのない幾何学紋様が、シンメトリカルに描かれた重量感溢れる観音開きの扉だ。

片面だけでも十トンは超えているだろう。

開く仕掛けがどこかにあるはず……。

「ここなのだ」

そういってイルマは、軽く扉に手をかけた。

「え？」

扉は、音もなく軽やかに内側へ開いた。桃矢を迎え入れるかのように闇が口を開ける。

どうやってあの重さを打ち消したんだろう？　桃矢は不思議に思った。

桃矢の疑問を置いてきぼりに、無警戒で入っていくイルマ。

「さあ、入るのだ」

「おじゃまします」

つられて足を踏み入れる桃矢。入ったは良いが、見えるのは桃矢の四方、数メートルの床だけ。

細くて長い通路を歩いていく。皮膚感覚や音の反響具合で、そこそこ広い空間らしい事だけは解る。
やがて前方に柱が現れ、通路は行き止まりとなる。

「ちょっと乱暴であるが、……これを見るがよい」
イルマが懐から取り出したのは、不格好な拳銃。
彼女は特に目標も決めず、仰角四十五度で弾を打ち出した。
上空で白色光が爆発する。
照明弾だった。

ここは、巨大な空間。ドーム球場を何個も立体的に積み重ねた広さだ。

「な、なんだ？」
目前の柱は、空間の中央で天と地を繋ぐ巨大な円柱だった。
正面左に浮かび上がったのは、赤い女神の巨大な座像。
正面右に写ったのは、鎧に覆われた黒い鯨の巨像。

「なによ、これ？」
左後ろに影を落としているのは、鱗に覆われた青い巨木。
右後ろの小さな白い影は、長毛に覆われた四つ足の獣。

桃矢と桃果は、ドーム中央の柱まで伸びた、細長い渡り廊下状の通路に立っていたのだ。

「クシオ様配下に五神あり。炎の女神にして戦の神、全てを否定する赤のファム・ブレイドゥ様。水の神にして癒しの神、全てを肯定する黒のブレハート・ドノビ様。木の女神にして生けるものを育てる神、全てに力を与える青のヴィム・マクス様。鉄の神にして実りと収穫を約束する神、全てに変化をもたらす白のファール・ブレイ

ドゥ様。そして、大地の神にして巨大な船、物言わぬ黄色のタミアーラ様。この五柱がタミアーラと共にゼクトール島へ降臨なされ、いまもどこかで確実に眠っておられるのだ」

胸に手を当て目を閉じて祈るイルマ。神と神にまつわるコトバを口にした神職者は、神聖な何かに祈るもの。

大事な話なのだろう。……聞いてる桃矢にとっては、ただの長ゼリフに過ぎないが。

やがて、照明弾は地に落ち、消えてしまった。周囲は前にも増して闇に包まれる。

目で判別できるのは、小さなランタンの光が届く範囲。

テラスの先端。小さな構造物から、ジョイステックのような突起が一つ出ていた。

周囲の巨像から考えて、……無理やり考えて、蛇を模したと思われる。

桃矢の腰あたりの高さから生えている蛇は、四十五度に伸びて、桃矢の喉元あたりの高さで大きく口を開けている。

明かりに不自由する中、目をこらしてみると、蛇像の口に埋め込まれた、水晶らしき透明な半球体が見て取れた。

イルマの説明が続く。

「陰の儀式は、王位を認めるもの。そして陽の儀式は国民に報告するもの。つまり、陰の儀式こそ、即位式の本分であると言えるのだ」

手にしたランタンを蛇型構造物の脇に置き、振り向くイルマ。逆光になったので、イルマの顔がよく見えない。二人いた女官も、いつの間にかいなくなっていた。

桃矢は、誰かが唾をのむ音を近くで聞いた。いや、自分の喉から聞こえた音だった。
桃矢だけではない。桃果やミウラまでが緊張していた。
「これから行う儀式こそが陰の儀式。要は、これさえ無事に済ませば、事実上、トーヤ殿は王の地位を得たことになる。晴れて陛下なのだ」
くだけた口調のイルマ。軽い空気に、ちょっとだけ気が楽になる桃矢。
イルマが笑った。
イルマは、桃矢達の緊張を考えて、わざと言っているのか？　だとすれば……桃矢はイルマを子供扱いしない方がいいのかもしれないと思った。
「これより、ヌル教に伝わる王位承認の秘術を執り行うのだ」
イルマは両手の指を広げ天に伸ばし、高らかに宣言した。
「あ、あの、イルマ様。わたしはここにいない方がよろしいのでは？」
ミウラが、おずおずと申し出た。秘術という言葉がミウラに遠慮させたのだ。……興味津々の桃果は、全く遠慮してないが。
「よい。たまには政府関係者が立会っても神罰は下るまい。……それにジェベルはどうも苦手なのだ」
最後はゴニョゴニョと小さく誤魔化してしまいながらも、何やら袖の下で印を組んでいるイルマ。もう即位の式は始まっている。
「このご時世。国防委員長のミウラが立ち会うのは、相応しいかもしれないのだ」

イルマは意味ありげにニヤリと笑って祈りの言葉を詠唱しだした。
桃矢が聞いたことのない言葉だ。やたら短いセクションで区切る、珍しい言語だった。

「あれがゼクトール語ですか？」
隣で頭を下げているミウラに、桃矢が小声で聞いた。
「あれは古代ゼクトール語と言うべき真ゼクトール語です。大昔、この半島に王宮があったのです。王がここに住んでいたときはこの言葉で会話していたそうです。何代目かの王が、ここを離れたとき、同時にこの言葉も失ったと聞き及んでいます。今、真ゼクトール語を話せるのはイルマ様方、ゼクトーラ一族だけなのです」

「そこ、うるさいぞ！」
イルマが指さして桃矢達を注意する。
「申し訳ありません！　甘んじて処罰を受け取ります！」
ホルスターから抜いた拳銃を自分のこめかみに当てるミウラ。
桃矢は、慌てて取り押さえた。組み付いた身体の下で、プニュンっと柔らかい感触が……。

さらに慌てて飛び退く桃矢であった。

11．アンダー・ザ・グラウンド（後書き）

次回、「光に向かって！」

なんとなくフラグ的な副題…。

12．光に向かってダッシュだ！

「まあ、よい。所詮は儀式。意味のないつまらぬもの。これより本番。トーヤ殿！」

クイクイと手を上下させ、赤ら顔の桃矢を呼ぶイルマ。呼ばれるまま進み出た桃矢は、イルマの指示で蛇像の前に立たされた。

九十度に開かれた蛇の口から見える水晶が、黄色いランタンの光を吸収したのか、淡く底光りしていた。

「その玉は『神の目』と呼ばれているものでな。こんな事、予の立場で言ってはならぬのだろうが……」

声の音量とトーンを一つずつ落としていくイルマ。

「おそらく、なんらかの畜光物質が仕込まれておるはずなのだ。予も見たことはないのだが、伝承では赤く光るらしいのだ」

まさに種のない奇跡はない。神官長が一番解っている。種を知るものが詐欺師というが、はたして、そんなんでいいのかと思い、桃矢は苦笑いした。

「後は、トーヤが自分の名前を言ってから覗き込むのだ。そのあと、一通りの説教を垂れてお終い。早く済ませるのだ」

自分の仕事はもう終わり、とばかりに肩を揉みほぐしながら桃矢を急がせる。厳かなムードなどありはしない。

なんだか、想像していた即位式と違うなぁと思う桃矢。

歩くのも苦労する豪奢な礼服とカーペットのようなマントを羽織って、年老いた神官から刀を肩に当てられる。そんなヨーロッパ様式から遠く離れた、ちょー簡素な儀式。

「文化圏と価値観の違いなのだ」
イルマは平然と言い放つ。

やれやれとばかりに、桃矢はのぞき込む。赤く光ればそれでオッケイ！
「えーと、芦原桃矢です。よろしくお願いします」
あとは赤く光れば……赤く――。

「あのぉ……青く光ったんだすけど？」
恐る恐る振り向く桃矢。イルマにお伺いを立てる。
「むう？　青くとな？」

背伸びして水晶玉を覗き込むイルマ。しかし、背が届かない。仕方なくイルマの脇に手を添え、抱っこしてあげる桃矢。
柔らかい手応えと暖かい体温。イルマは、見た目以上に軽かった。

「確かに青いな？　うむ、予の聞き間違いであったか？」
足をプラプラさせたまま、腕を組んで首をかしげるイルマ。

「まあ誰にでも聞き間違いはあるさ」
桃矢は軽く言っただけだが、イルマのプライドを引っ掻くには充分な棘があったようだ。

「トーヤよ、いつまで予を抱っこしておるのだ？　早く下ろすのだ！」
「あ、ごめんなさい！」
慌ててイルマを下ろす桃矢。
「あらら、桃矢君、年下趣味だったのぉ？」
こんな場所でも突っ込む事を忘れない桃果。さっそくイタチ目をして桃矢をからかう。

その尻馬にイルマが乗った。
「未成年に手を出すと後がうるさ――」
遠くの方で音がした。空気が漏れる時の圧搾音に似ている。
ここは神像が眠る巨大な闇の空間。圧倒的な空域感覚に、四人は固まった。
「た、たぶん、地上でコンプレッサーを動かしたんじゃないかな？」
桃矢が、推理を披露した。紙のような薄っぺらい笑顔を貼り付けて。だって、ここは巨大な四神像しかないじゃないか。
「コンプレッサーと神殿って、なんだか関係遠くなくない？」
桃果が一刀両断で否定した。
そして、否定した本人が、一番後悔した。
蛇神像の影が、ランプの光に揺れている。陰影がはっきりしない石像は、どこか神秘的。
「ま、まあ、これで無事儀式も済んだことですし……」
ミウラがホルスターを押さえながら出口を指さす。
「早く地下神殿を出ま――」
四人とも、音になり損ねた音を聞いた。一番近い表現をすると耳鳴り。
桃矢は青い顔をしている。
桃果は、誰もいないはずの後ろを激しく何度も振り向いている。
ミウラはホルスターから拳銃を引き抜いて、安全装置に指をかけていた。
イルマは平然とした風情で腕を組んでいるが、顔面からダラダラと汗を流している。

「そうじゃな、あまり長いとジェベルに怒られるかもしれないのだ」
どこか子供っぽいイルマ。しかし、だれもそんな事、気にしていなかった。
「あれ？　この部屋、こんなに明るかったっけ？」
桃矢が天井を見てボケッと呟いた。部屋全体が青白い。
照明弾でしか見えなかった四神像のシルエットが、青白く厳かに浮かび上がっていた。
ランタンの光源は黄色かったはず。青い光と言えば……。
ゆっくりと、四対八個の目が、水晶球に集まる。
そいつは、さっきより青い光を増していた。
桃果が、出口に向かって、いきなりダッシュした！　続いてイルマが逃げた。桃矢の背を押しながらミウラが走る。
みんな黙々と走っていた。
喋るためのエネルギーすら脚力に回して走っていたのだった。

１２．光に向かってダッシュだ！（後書き）

次回「昔々」

以後、すこ～し間、開いてしまいます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0753z/

悪役上等！　武装戦闘国家ゼクトール

2011年12月11日12時52分発行